

不登校の対応をしていて思うことがある。

おそらく子どもは、不安と負担の積み重ねがあって、登校を渋る。そこに、「学校に行くべき」という声が重なり、不安が収まらない。そして、結局、不登校になる。

この状態は、多くの親・教師の悩みとしてある。小学生の不登校はこの10年間で5倍の増加である。そういう子どもは、上手に休んだりしながら、心を安定させることが、一つのやり方になる。しかし、「不登校の原因探しの落とし穴」にはまる場合がある。

よくある話に、親が「学校の何が嫌だったのか」を問い詰めることがある。まあ当然の会話だとは思うが、子どもが不安と負担の積み重ねの場合、うまく「これが嫌」ということを言葉にできず、親は繰り返し問うことがある。そうすると子どもは、学校であった嫌なことを何とか思い出そうとする。本人もそれほど気にしていなかったような、「友だちが冷たい目を見た」「遊びに誘われなかった」「避けられたような気がする」といった話を言い出すことがある。そして、そのうち親は、「うちの子はいじめられていた」と言い始める。明確ないじめは別として、学校の嫌な部分をイメージさせるような展開は、逆効果になる。

このようなケースは多い。教師も基本的にいじめ対応の事案として動く。今は、本人が対人関係でいじめと感じていたらすべていじめになる。だから、これまで対人トラブル同様の指導になる。つまり、すぐの対応がいいのだが、この場合そうはならない。子どもは、学校のネガティブなことを引き出され、負のイメージを強くしているので、完全に学校に逆走していく。また、相手の子どもも「そんなことはしていない」という場合がほとんどになり長引く。

不登校の生徒の中には、なぜ学校に行けないかわからなくて混乱している生徒がいる。その生徒対応は、「回復のプロセス」を意識する。まずは、学校のことを忘れる。そして、家庭で過ごすので、料理や掃除などの夢中になる活動をする。その中で、何かやり遂げた感を持つので、自信を回復していく。少し自信を回復し元気になったら、イメージの上書き作業をする。このイメージとは、**学校に楽しく行っていた自分の姿である**。このような「回復のプロセス」において重要なのは、その道のりは生徒自身が決めて行うということである。これが一番の近道になる。

自分で決めるという経験は、主体性の育成である。実は、レジリエンスが高い人は、小さい頃から、自分で決める経験を積んでいる。もちろん難しい選択ではなく、小さなことを自分で決める経験である。そうすると自分で考えるようになる。失敗もする。それも成長につながると、まわりが見守れているかが鍵になる。子どもは、何もかもうまくいくわけではないが、何もかもうまくいかないわけでもないという適正な考えを持てるようになる。これができると、今、何をしなければならないのかを考えられるようになる。

このような話をすると、親は「自分の育て方が悪かった」と自らを責める。誰が悪いという話ではない。誰も悪くはない。でも、親が、くよくよして元気がないと、子どもにその感情は伝染する。だから、親には「人生はいいもんだ」と子どもに自然と感じさせるような生き方をしてほしい。もしそれがウソの自分であっても、私はいいと思う。こういう、相手のためにつくウソのことを「ホワイト ライ (罪なきウソ)」という。

私たちの日常には、この「ホワイト ライ」がたくさんある。それでいい。